

文學博士 三宅雄次郎君序
 大僧正 本多日生師著

(再版四月廿八日發行)

法華經講義

洋裝全二冊貳千頁
 正價金四圓
 特價金參圓
 內地郵税金貳拾錢
 臺灣韓八百匁迄の小包料

目次

- ◎序說 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
- ◎第一節 ●第一節三種教相の綱格 ●第二節十雙權實の巧釋 ●第三節六重本迹の大意 ●第四節三法々鉢の
- ◎第二節 ●第二節待絕二妙の解釋 ●第三節一念三千の妙觀 ●第四節日蓮の法華緣起の妙旨 ●第五節本化別頭
- ◎第三節 ●第三節但令用實の解釋 ●第四節三尊の妙義 ●第五節佛界緣起の妙旨 ●第六節天台講經要義 ●第七節
- ◎第四節 ●第四節圓善の活釋 ●第五節十節台當教相の異目 ●第六節身讀法華の壯觀 ●第七節信念成佛の要道 ●第八節
- ◎第五節 ●第五節兩善一貫の活論 ●第六節十節台當教相の異目 ●第七節身讀法華の壯觀 ●第八節信念成佛の要道 ●第九節
- ◎第六節 ●第六節四教五時の統釋 ●第七節五重玄義の妙解 ●第八節日蓮上人の學風 ●第九節本化獨特の五玄 ●第十節
- ◎第七節 ●第七節釋の概略 ●第八節科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- ◎第八節 ●第八節譯の概略 ●第九節科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- ◎第九節 ●第九節參考 ●讚唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也
 古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所

東京淺草北清島町
 福善堂東京一三一九

統一

一

團

國民性と佛教

大僧正 本多日生

最善の信仰 辯護士 吉田 珍雄

日蓮主義の國家に對する態度 三上 義徹

海軍の話 海軍大佐 中村虎之助

統一

▲思想修養——▲日蓮上人傳試演
 ▲活動教信

生活問題と信仰問題
 古神道とは何ぞ

文學士 小林 一郎
 法學博士 寛 彦

村雲尼公猥下御題字

日蓮宗管長 旭日 苗猥下題字
 顯本法華宗管長 本多日 生猥下序文
 海軍大將 上村彦之丞閣下題字
 田中智學先生序文 文學士 國友日斌先生謹輯

日蓮上人自叙傳

全一冊
 ▲洋裝頗美本◎新式ポイント活字◎紙數五百余頁◎特製總皮
 三方金正價壹圓廿錢◎上製天金正價七拾五錢◎郵稅各八錢▼
 英雄僧日蓮上人の自傳なり、法華宗信徒は固より
 其教義を研究せらる、諸氏の愛讀を祈る
 ●御曼陀羅 御自筆佐渡國阿佛坊妙宣寺に藏する靈寶をコロタ
 イブ版印刷とし禮拜掛軸用として巻頭に添へあり

發賣元 取次販賣

東 振 東 京 市 神 田 區 錦 町 二 丁 目
 東 振 東 京 市 神 田 區 錦 町 二 丁 目
 東 振 東 京 市 神 田 區 錦 町 二 丁 目
 東 振 東 京 市 神 田 區 錦 町 二 丁 目
 東 振 東 京 市 神 田 區 錦 町 二 丁 目

勉 強 堂 一 統 書 堂 一 統 書 堂 一 統

主 張



國民性と佛教

大 僧 正 本 多 日 生

我國の國民性が如何なるものであるかと云ふ研究は
 近來盛んに起つて居ることあります、併し十分に纏
 つて居ないやうである、或人は三つ四つ擧げて居る人
 もあるし、六つ位擧げる人もあるし十位擧げる人もあ
 る、又十五位擧げて居る人もあります、それで輕重本
 未を十分吟味して何所が國民性の貴い所だと云ふやう
 なことに就ては、さう明かになつて居ないやうに思ひ
 ます、無論國民性として忠君愛國の觀念に富んで居る
 と云ふことに於ては議論はないやうであります、其
 他の點に於ては色々見解も違ふやうであります、私は
 今國民性の吟味をするのではない、多くの人に依つて稱
 へられて居る國民性、其重い輕いを考へる譯でもあり

ませぬ、それと佛教との關係を見やうと思ふのであり
 ます
 自分の考としては國民性の忠君の精神に次いで起つ
 て來るものは實行的性質であると思ふ、不言實行の國
 民である、其實行的の意義と佛教とはどう云ふ關係が
 あるかと云ふと、佛教は一方から見ると出世間的の教
 だ、厭世主義だと云ふことを申しますが、さう云ふ佛
 教もあります、ありますが佛教の眞價のある所と言ひ
 ますか、深い所と言ひますか、本當の所と言ひますか、
 佛教の貴い意味の所は、何にもしなして居ると云ふや
 うなことを理想としては居りませぬ、其ことは佛陀の
 人格の上に就て考へましても、釋迦牟尼は唯座禪ばか

りして居つて何にもしなかつた者かと云ふとさうては
ない、其の生涯を通じて修養時期に於ての熱心なる有
機、それから傳道の時期に於ての熱心なる有
機、それと座つて居つても其間の事柄と云ふものは非常
な熱誠なものであつて、何にもしないと云ふ風に見え
る時でも、活動の人が活動して居る時よりもより多き
活動力を持つて居るものであると信ずるのでありま
す、さればこそ此偉大な感化を遺したものであつて、
中々どうも大活動の人である、それで又弟子達の事蹟
を見ましても、各自に傳道をし、又事業を起しまして
中々活動をやつて居る、活動と云ふことは唯跳躍するの
てはない、書物を見ても其他學と云ふことが、三十年
五十年屈せず挽かずやつて居る、實に實行的の意味を
現はして居るものであります、唯いつもボカンとして
欠伸ばかりして甚でも打つて居るとか、晝寝でもして
居ると云ふ者は佛弟子でないといふことを涅槃經にも
言つてあります、御經を讀んでも佛敎の規則に依て座
禪して居つても、放逸の徒は是は外道婆羅門の輩と

あると言つて居る、非常に怠けると云ふことを攻撃し
て居る、日蓮上人などもそれであるから、徒らに遊戯
雜談して明し暮さんは法師の皮を着たる畜生なり、法
師の名を偷める盗人なりと言つて居ります、怠け者は
外道婆羅門の徒である、佛弟子でないといふことは所
々に書いて居ります、そこで釋迦牟尼は涅槃の夕べに
も活動と云ふことを遺訓した、懶け者はどれ程修養を
積んでも活動と云ふ一つを除いたならば何にもならぬ
ものであると云ふことを言つて涅槃したのてあります
から、佛敎の實行的と云ふのは非常に強いものであり
ます、即ち佛敎に於ては精進と云ふことを言ひます、
奮迅と云ふことを言ふ、勇猛精進なんと云ふことを言
ひますが、此精進と云ふものは特別な意義のものでな
い、人間性の中に五根と云ふものがあつて、信仰の發
生する性質と、物の善いことをすつと自覺して忘れぬ
やうにして行く觀念の性質と、それから物を仕上げて
行く精進、是は皆根と云ふ字を附けて居りますが、信
根、念根、精進根と云ふものを持つて居るのでありま

す、それを引出してやると云ふことを説いて、到る所
に佛敎に於て五根と云ふことを言ふので、之に定根慧
根と云うて、人間が精神を鎮める事柄と智慧を働かす
こと、それを加へて五根と稱して居るのであります、
一口に善根と申しましたならば是等を皆含んで居るの
てあります、善根と云うて施しをするばかりでない、
やさしい心ばかりを言ふのではない、五根を包括して
善根であつて、信根も善根なれば精進も善根である、
斯くして實行と云ふことを促がして居る、それは三祇
百大劫などい言ひまして永い間屈せず挽かずやるので
あります、百年で宜い千年で宜いなんと云ふことは言
はない、一切と云ふのが無數なのであります、屈せず
挽かずやらなくてはならぬのであります、例を擧げて
居りますが、敵軍が十萬も居る、此方は一人しか居ら
ぬ、それで此敵に向つて進まにやならぬが、臆病の心
が出来て腰を抜かして仕舞ふやつがある、又途中まで
行つて腰を抜かすやつがある、敵陣に飛込んで行つて
殺されるのもある、それは皆我が弟子とするに足らぬ、

敵陣に行つて戦つても負ける奴は我が弟子ぢやない、
十萬の敵軍を討平げて凱歌を奏する者にして始めて我
が弟子たることを得ると言つて居る、とぼけたやうな
人間を佛様みたやうだなどい云ふのは間違つて居る、
(二百三高地から突貫して旅順を陥落する、あの時の有
様が以て佛弟子たるに足れりてあります)佛敎の中に
現はれて居る高僧碩徳などに於ては非常な奮闘をやつ
て居るのであります、其奮闘の事柄が覇さをするやう
な事柄でないから花々しくないけれども、皆人の爲し
難い事業をやると云ふことに於て、犧牲的精神に富ん
で居る者は、其名前を記憶することも出来ないほど澤
山の偉人が出て居ります、てありますから實行的と云
ふことは、佛敎が本當の意義に於て發展すれば益々盛
んになるものである

又日本の國民には包容性と云ふものがある、日本人
は狭い量見の國民でない、有ゆる思想を包容するを以
て眞正の日本人とする、量見のけちな奴は日本人でな
い、そこで佛敎は頗る包容性の宗敎でありますから、

佛敎が来て日本人の包容的の特性を益々發揮せしめたものであつて、佛敎が来て日本人は量見を狭くしたと云ふやうなことは決してありませぬ、それを考へなければならぬ、又日本人には統一性がある、即ち包容ばかりした所がそれでは行かぬ、中心を立て、それを統一して来る、即ち日本化するると云ふ性質がある、其統一性がある、佛敎も習ひ損ふと、應病與藥と云つて八萬四千の法門は、方便に方便を重ねて捕捉する所を知らない、此佛敎の廣い意義を統一することは中々むづかしいが、無量義經を見ると統一の一法である、一妙法であると云ふことを如來が説かれてある、佛敎から廣い包容性のもので而かも統一の中心を明かにして居る教はない、そこでさう云ふ譯でありますから日本の國民性である統一性と云ふこと、佛敎の統一性と云ふものは極めて順應調和して行く所のものであります、又日本の國民には現實的性質がある、餘り未來の事ばかり心配したり、見えないやうな事ばかり考へたり、雲のやうなことばかり考へては居ない、現實の社

會及人生を向上せしめやうと云ふことを考へて居る、是は宜いこととありますけれども、宜い所に短所がある、深い所の思想を顧みない、高い信仰を顧みないといふやうなことで、現實性が今の物質文明に流れますと最も墮落し易い傾向を持つて居ります、過去の歴史に於ても平安朝の佛敎が或現實性と調和しまして日本の現實性を墮落せしめました、現實が必しも宜い譯ではないが長所と短所がある、健全なる佛敎は、御承知の通り理想と現實とを融合して来るものである、極めて高い理想を堅實に世の中に實現せんとするものであるから、日本の現實性の短所を戒めて長所を發揮するものである、さうでない現實を無視したる佛敎観であるとか、現實に雷同して其弊を助長する佛敎は、不健全なる佛敎であつて釋迦牟尼の本旨にあらずと考へるのが當然である、何事にも誤つたことが起つて来る、惟神の道でも神道の埒外の方に這入つて鼻向けのならぬものがあります、儒敎の中でも僻論に捉はれて淺問しき有様になる、如何なる道でもやり損うたるも

のを見れば行けないものでありますから、立派に見へても佛敎を悲觀的に應用するとか、迷信淫祠を助長するとか云ふことは、國家に害あるばかりでない佛敎の本旨に背いて居るものであります、其他のことは多く論ぜずして考へなければならぬ、佛敎は現實的のもので未來的のものだ、何も知らぬ間は何とでも言つて居るが宜いけれども、今日多少でも研死するやうになつたならば、さう云ふ古い眼りを貪つて居ては行けないと思ふ

日本の國民性に樂天性と云ふものがある、詰らぬことを心配しないのは宜いこととあります、どうも悲觀と云ふことは人生を疲らす所以である、勇氣を無くす所以でありますから、詰らぬことにベツ／＼泣くのは可かせぬ、現代の輕疎浮薄と云ふことは一方から言へば樂天であります、何に不都合なことがあつてどうされても構ふもんか、世の中のことはどうあらうと斯うあらうと構はぬ、自分は自分でやつて行くと云ふ所謂放縱の生活、自由の生活、新らしき人と云つて居る

のは、是は樂天が病に罹つて居るのである、唯樂天々々と云つても心配すべきものを心配しないでやつて居るのは行かせぬ、何かの雜誌に書いてありましたのを見たら、親が病氣で死んだ所が痛くも痒くもない、永く生きて居られれば世話をせんならぬから却てこまゝ、それよりは學校に行くのに靴下が破れて居る、親が死ぬは宜いけれども靴下の破れは大問題だと書いてあつた、靴下が破れて足が痛いなどと云つて居れば面白いやうな意味になつて居る、親が死んでも何とも思はないから願ふ樂天であるが、それは即ち大弊害である、日本の樂天と云ふことも俄かに賛成することは出来ない、ちよつと聞て宜いやうなことも半面には弊害があるから、佛敎は縱横無盡に説き切つて居るので、下手に使ふと種々の弊害が出て来るけれども、適當に使へば如何なるものにも最後の光を放つ教である、使ひ方が悪いと宜くない、さう云ふ譯であるから樂天性に就ても、決して佛敎が長所を破壊して短所を助長するやうなものでない、其外色々な性質があつて單純性

と云ひ淡白性と云ふのがある、潔白性感激性、短氣依頼淺薄銳敏狹隘虛榮、中々日本には善い所ばかりではない、そこで其惡いものを佛教が助けるかどうかと云ふことを考へて見ると、佛教に依て人が短氣になつたと云ふことを聞かない、佛教を信ずるから人情が薄ツペラになつたと云ふことを聞かない、あれは信心するやうになつたから神經が昂進して來たと云ふこともない、信心すれば神經過敏と云ふことも薄くなるし、虛榮に走ることも薄くなる、使ひ方に依れば惡い所もあるけれども佛教を敵として己れに得る所はない、日本國民性の弱點は佛教に依て救はれる、そこで佛教の不健全なる分子を改善し、健全なる佛教によりて日本の國民性の短所を補ひ、兩々相待つて健全なる文明を進めると云ふ風に考へて行くのが穩健の思想である



我國の過去の文明は何うか、神代より王朝時代に至る間は支那印度の文明を輸入して、日本の發達文明を助けたのであります、天智天皇の御代には著明の進歩であつた、而して王朝の末より徳川時代の末に至るまでは、外國との交通がない、其間に於ける日本の文明は、自分の力を以て發展さして來たのである、次に徳川時代の末葉より明治時代は、盛んに外國との交通を開いて西洋文明を輸入し、日本文明の内容を豊富にすることになつた、が而し此の時期は外國と競争した時代ではない、競争して優勝者とならうとはしなかつたので、先方の程度に追付うと云ふ態度であつた、また外國でも日本と競争しようと思ふ考へてなく、日本人

生活問題と信仰問題

文學士 小林 一郎

は并疊である可愛國民である、愛嬌があると云ふて面白半分て言つて居つた、外國では多く好奇心を以て見て居つたが、今日は實力を認むる様になつた、けれども尊敬を拂つては居らぬ、而し時勢は進んで、日本も文明を採り入れて日本化した、居る、外國も日本を可愛國民と見て居つたが、今は眞面目に競争して日本の發展を止めなければならぬと云ふことになつて來た、外國は其決心をして外交に軍事に學術の各方面に互りて競争を續けて居る、日本の歴史は長くとも競争した過去がない、斯かる關係であるから過去の時代に成功した人であつても、新たな關係に於て立派なる事業が出来来るや否やは疑はしい、過去の時代の如く國內だけで腕を振つて尊敬されて來たものでも、今日の時代に役に立つか否かは解らぬ、一時の頓智ではいかぬ、察する所吾人の先輩では立派なる仕事は出來ないと思はる、今後は年若いものが難局を背負ふて引受ける、先輩は其終りを全ふせしむれば宜い、吾人は微弱なりとも一生涯に年寄を世話して、自分だけの力を以て世

界的活躍を爲さねばならぬ、青年は此覺悟を以て進路を頼まぬ心懸けが大事である、然るに困難なるは生活問題である、生活上には常に脅迫を受けて居る、道學者は學問しても中々生活に困難であるが、少しも學問せざるものか案外樂な生活をして居る、困らない方は困る方の察しがない、確かに一種の脅迫を受けつゝ暮して居る、之を我國の財政の上から考へると、二十六億の借金がある、一年に國債の利子を七千萬も支拂ふのであるが、日本の地の底から出た金は三千萬足らずである、之を續けたならばどうなるであらうか、斯様な状態であるから、個々銘々が生活問題に追はれて困りて居るのは無理でない、それに生活の程度は非常に高まりて來た、之も已むを得ない、各國と交通する場合に高い程度が卑い方を感化するのである、近年生活程度の高まつた事は非常なもので、其一例を挙げるに、帝國大學の前に理髪店がある、二十七年頃五錢の理髪料が高いと云ふて四錢の店に行つた、が大正二年には二十三錢になつた、もう一つは本郷若竹亭の木戸

が四錢で、十錢持て行けば菓子と茶を取りて足りたものだが、今では木戸だけで十五錢とか廿錢である、歌舞伎へ行つても二十五錢の木戸に十二錢の辨當で済んだ、また大學生の學費は當時平均十七圓であつたが、昨年の調べには平均三十五圓と云ふ事である、吾々の學生時代には、一帖八厘のロール半紙で一錢の鉛筆で筆記したけれども、今日ではそんなものは見當らない、世の中が萬事そうなつて居る、金がない苦しいながらに驕つた生活をする、果ては食ふに困るやうになる、さうして貧富の懸隔が甚しくなる、生活問題が苦しくなつて來ると、金が難有がられるから金を以て正義を蹂躪する様になる、けれども之を緩和する方法がない、この複雑なる社會を始末するには、どうしても人間以上の或威儀を持つて來て救ふより外に途がない、自分一人の心で極めるだけでは力が薄く、人間として眞面目に生活を送れると云ふことを確實に極めなければいけぬ、さあそうなると、どうしても現在以上に心の根を置かねばならぬ、生活問題を生活で解釋することは

出來ぬ

日蓮上人の立正安國主義は、今日の時代に最も適切である、この主義によりて吾人の生活問題を解決し、眞面目に自分一人としての事業を努めねばならぬ、吾々は上人の仰せられた如く、二陣三陣と打續いて精進奮起し、生活問題の最後の解決は、信仰によりて根底ある革新を求むべきことである、斯かる信仰は此世を別にする念佛門ではいかぬ、世間の實情を冷かに見たり禪はいかぬ、此の國と淨土とを一貫したる上人の教に依りて現代を救はねばならぬ、活きた信仰を以て活きた世を救ふことが大事の中の大事である

一高帝大學生有志の爲に統一閣樓上に於て講演せられたるもの、筆記其意を盡さず僅かに大意を摘記したるのみ (白碧)

尋ねゆく清水にちかき道ぞこれ

御法の花の露のした影

折 伏



日蓮主義の國家に對する態度

三 上 義 徹

某日一人の青年予の寓に來る、青年は高等教育を受けたる上、眞宗の教義を學んだものと云ふ、如何にも談ずる所信仰的で熱烈である、而して日蓮主義に對する疑問を告げて云はく

一、日蓮主義は頻りに國家主義を唱ふるが、宗教なるものは絶対超越的のもので國家の圏内に囚はるゝものてな

一、又宗教は個人と絶對との關係であつて、個人對國家關係の性質のもてない、眞理は國家を超越せるものてある

と謂つて日蓮主義の國家的精神を批難するものがあつた、けれども彼は未だ日蓮主義の何ものなるかを心得

ざるもので、懼るべき鮮見に陥つて居ることを自から知らぬのである、日蓮主義は國家の圏内に支配せられて法自身の理義を滅却するが如きものでない、日蓮主義の國家觀は深き根柢を有つて居る、公正の見地に立て法華の實相觀を窺へ來らば、一點の疑もなく直く解る、而して法華の實相なるものは、世間相を否定して他に實相ありと觀るものでない、千波萬浪の差別的現象即ち實在にして、縁起起伏の世間相の中に實在は存して居るので、即ち假諦常住生死即涅槃と開顯し、日蓮上人の立正安國論に説ける

三界皆佛國也佛國其衰哉
の聖文を味讀せば、此有限的世界より直ちに絶對無限

の時間空間に連つて居ることが解る、而して此有limitsの世界が無限絶對の實相と別存して居るのではない、この差別相の中に無限の實相を存する、故に其差別相の世界に於て、一面には多數人の幸福を保障する國力を有し、一面には大徳教を擴充して世界の健全なる文明を補導し、人生最高の意義を發揮するので、即ち個人格を尊重して其處に佛性の顯動を観るが如く、國家の有限性を認めて而かも其中に世界的理想を活現せしめんと欲するのである、道と國とは没交渉のもてはなし、互に相倚り相資けて以て其理想を遂行せんとするもの

國依、法昌法依、人貴、國亡人滅佛護可崇

との文意を大觀し來らば、此間の消息を會通することが出来ると信ずる、勿論國家を中心として觀る場合にも、宗教は必ず其内面に活現して居るので、若しも國家が宗教の權威を蔑如し思想の問題を輕視するものあらば、人心荒廢して鬼神亂るゝに至る、鬼神亂るゝが故に國紊るゝのである、即ち鬼神と云ふのは人格的に

せぬ、唯だ對機關係に偏して時も國も鑑みざる教は、時代を指導する力がない、教としては片輪である、假りに國家は船であるとすれば個人は乗組員である、其乗組員の安全を期せんとせば、先づ須く船の安全を圖らねばならぬではないか、即ち國家を離れて個人の存する理のあらう筈がない

汝須下思、一身之安堵、一者先禱、四表靜謐、一者歎

とは最も明かに其意義を言ひ表はされたものである、斯の如く國家主義ではあるが個人を忘れない、個人を尊重して國家の尊嚴と一如し、能く兩者の關係を調和融節せられたる最善の主義である、この個人對國家の關係は、多くの教に於て其比を見ざる所であつて、殆ど乎として個人思想の挑梁せる現代に於ては、確かに偉大なる覺醒の力がある、之に依て國民思想を洗練淘治して最後の文明を築き上げねばならぬが、是皆法華の實相觀より顯動し來れる國家觀である、然るに此大主義の源泉を汲みずして、徒らに囚はれたる個人觀の病見によりて妄評を試むるが如きは、誠に自家の識見

觀たので、之を非人格に見れば眞理である、それ故に何と云つても國に正しき教法の存立せざる間は、其國が健全に發展するを得ざるは自明の理である、亦宗教は個人との關係であると言ふが、國家を離れて個人なるものは何處に生存するものであるか、故に國家と人生とを啓導するそこに個人は救濟せらるゝのである、日蓮主義は熱烈なる信仰を與へ、國民道德の實行を進むる徳教である

天晴地明識、法華一者可得世法一歎

と道破せられたる所、眞に千古不磨の金句であつて、世法とは忠孝爲本である、其忠と言つても至誠の念を缺いた義務的の表現でない、國民性の眞源を捉へ來りて忠道の本義を明かにされたのである

孝子慈父の王政となれば父を捨て、王にまいるは孝の至り也

と明確に忠道の精華を發揮し得て一言の加ふべきものがないではないか、日蓮主義は源頭愛國の赤心より發して、道を學び法を究むるので單に個人の爲のみには奮闘を敢てするものである

先安、生前、更、扶、沒後

とは正しくこの意義を鮮明にせられたるもので、世出二門の救濟的事業が宗教の本義である、特に此文の中に先の字あることに注意を拂ひ其意義を體得せねばならぬ、此は是れ極力、厭離穢土の思想に折伏の鞭を加へて立正安國の大義を疾呼せられたので、日蓮上人は一面如來の使命を帯び、一面國を愛する大誠忠者として、思國知法の最高潮より突發し來りて現當一貫の立正安國を願ふので、此の國家と法華經との深き因縁を感孚したる日蓮上人は

予拜、見起文、兩眼如、一滴、一身偏悅

との法悅に充たされて居る、あゝ道を信ずる程人として貴とさばなく、國を思ふ程其風格の高きものはない、

上人が兩眼瀧の如く悦び給ふ所以は、法華經の絕對無上の聖教たるを、此國が宇内無比の靈國であるから我日本國は一潤浮提の内月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも超へたる國ぞかし

と其御國體の尊嚴崇高にして永久存立の理想あるを認め、更に教法の上より

一向純圓の機也

と宣言して無上の光榮を思ひ、悦び身に餘り感極まりて兩眼瀧の如く涙の下るを覺えなかつた、是即ち宗教發展の背景には、國家消長の問題が横はつて居るからである、是全く他の宗教家と異なる所で、彼の安養淨土を見出だしたるがために御國體を厭ふて世を悲觀せる法然親鸞の末流には、國家と教法との關係は解る筈のもてない、日蓮上人の嚴誡を拜すれば

汝早改二信仰寸心一速歸一實乘之一善一

とある、凡小の信仰理想に囚はれて更に大なる理想に向上せず、分裂的の信仰や不統一の道德思想を固執して、之を改めざるは斷じて許すべきでない、國民思想

の不統一は國運の進運に勢なからぬ關係がある、ことに現代は幾多の思想亂れ亂れて國民をして其歸趣を惑はしめつゝあるので、日蓮主義の靈力によりて洗練を要するのである、日蓮上人は自から稱して余は何れの末葉にもあらず又宗祖にもあらずと仰せられたが、單に一教團の元祖でも宗祖でもなく、一宗一派の宗祖とのみ見るは上人の眞意に背けるものである、高山樗牛氏の言はれた如く、世界的大宗教家として國を擧げて鐵仰の熱を高め、國民的運動として日蓮主義の物典を圖るのが至當であると信ずる

青年よ、近代文藝の自發享樂主義に憧れて、自己生存の地上を莊嚴せしむることを考案せざることは、其根本に於て謬りである、自我の發展を極端に主張して居る思想は今の文藝に多い、六月の早稲田文學に相馬御風なども論じて居るが、予輩は之を病態として之を採らない

神道研究

古神道は何ぞ

法學博士 寛 克彦

古神道の神神の本質はどんなものであるか、古神道にては大別して二種類の神神を認めて居る

第一種の神は唯一の天之御中主神である、此神は世界の中軸にして其根底たる神で、又實に一切に遍滿して居る神であるから、宇宙一切の眞の大生命であり、一物として其顯現に非ざるはない、時と所を異にする一切の事物の各々の其儘内在し乍ら、尙同時同所にして唯一なる不生不滅の生命である、造化も生命も、被造化も被生成も皆此神以外に存するものではないけれども特に造化生成等といふ域を超越して居る絶對の大生命である、宇宙の大生命ではあるが、過去現在等に實現せられたる宇宙のみに限つて共通なる生命に止まらぬ故に所謂宇宙と其存在の範圍を同するものでなく、

其内に埋没し終る神でなく、愈々宇宙一切の事物を顯現せしめて盡きざる其生命である、一切の事物は此天之御中主神に歸一し、其表現者であり其發現者であるので、皆此神に歸一する點に於て不生不滅の方面を有する第二種の神は八百萬神である、天之御中主神は不生不滅の大生命であるが、唯凝然と其不生不滅絶對無限唯一遍滿や、總てを含みつゝ總てに超在することになど執着して居らるゝのでない、人格と非人格とを含みつつ神格として是等に超在せらるゝ事に偏執せらるゝ御方でない、そこで天之御中主神は已一個にて存在せらるゝ神でありながら、必ず其表現者と離るべからず存在せらるゝ、古神道の第二種の神は是等無數の表現者にして、即ち八百萬の神である、此無數の神々は唯一の天之御中主神の表現者で、必ず其表現の分擔を有するが故に、其性質其作用に於ては有限である方面もある、然し孰れの神々たるを問はず其内部には悉皆の天之御中主神を包藏して居るから、此點から見れば尙神たるを失はぬ、夫故神として、有限の性質や作

用を通じて尙無限である、有限の分擔を有しながら之により無限を顯現しつゝあり、其生命にも不滅の方面があり、半分の神とか神の四分の一とかいふわけになく神夫自身である、各々神其儘ではあるけれども、尙神々が相互に權限を以て對立していらせらるゝ、從つて天之御中主神の悉者が即ち其一表現神により獨占專有せらるゝのではない、天之御中主神の表現者として世界の創造化育生成者として、世界と對立する神を高皇產靈神神皇產靈神とする、此神は二柱にして尙一柱の皇產靈神に外ならぬ、大愛大智大意思を統括しつゝある宇宙根本的の造化生成を掌り、向上の大生命により一切を總攬する基をなされつゝある、此總攬の大權を繼承し少くも俗權につきては先づ豊葦原の中つ國に於て實現せられ、皇產靈神と御一體をなしていらせらるゝ御方が現人神たる天皇であらせらるゝから、天皇は唯強制力などを振はれる御方でなく、大愛大智大意思を統括せられつゝある大創設大生成作用を表現せられ、人間向上の大生命を實現せられつゝある御方たる

ことは疑ひない、夫は兎に角として根本をいへば、皇產靈神が造化生成の神で世界と對立超在して居り、然も實は世界の根原たる天之御中主神の一切表現者世界一切の事物中に、そつくり其儘内在して居るのである天之御中主神は、世界と丸て同じではないが、世界と對立することを本質とする神でなく、世界の創設者とも被創造者たる世界ともいはれぬが、皇產靈神は世界萬物の創造化育生成の活生命として被造化物等と相對立する神である、向上の大生命として向下的方面と對立する神である、此事柄は假令一物中に皇產靈神が内在すると見るときにも變つたことはない、其事物中にも常に創設的生命生成的生命向上的要求が在り、之と對立して同時に被創設的方面被生成的方面向下的要求が在るからである、斯様に皇產靈神は必ず其對立者の存在を前提するのであるが、常に其對立者對抗物を統括して自由に偉大なる作用を行はれ、宇宙の向上造化生成をして絶ゆる時なからしめつゝある

面白いことには皇產靈神は一柱にして尙二柱とも見

らるゝ點は、古神道の信仰が專制的でないことを示す一つの點である、天之御中主神すら神たる性質を一切の表現者に分與せられ、又宇宙の造化生成を表現せらるゝ神は皇產靈神を以て盡きて居るわけがなく、其總攬の下に諸般の神々が在る、我々とても、一方に於ては我内部に皇產靈神の全部を現はし、此神の造化生成の力を實現しつゝあれども、他方に於ては我一流の造化生成の力を出して（即ち直接に天之御中主神の表現者として）皇產靈神の造化生成力に對抗し之を刺激し之により總攬せらつゝあるのである、されば我々とても尙各自の範圍につきては造化被造化其他の點につき尙直接に天之御中主神の表現者といふべきもので又皇產靈神に歸一して其造化生成を實現しつゝある、我々の創設力も亦實に顯著なるものといはねばならぬ、たゞ過去現在未來の無數の創造力と對立し之と協力し之と競争し之と衝突して創設作用を行ひつゝあるのじやから、其結果制限をも受けるし法則じやの必至じやのといふやうな事と離れぬ事になる、然し之にも拘はら

ず吾人が神として神の創造化育生成作用を行ふことが主で法則や因果は第二段に其利用の爲めに存在し、其途行きとして存するものに外ならぬ、古神道の第二種の神々、即ち八百萬の神々は相對立して皆天之御中主神に歸一する神々である、皆此唯一神と表現歸一の關係に立ち、又互同志の間に於て互に他の一切の神を己れの内部に統括包蔵しつゝあることはいふまでもない、天之御中主神のみが八百萬の神により歸一せられ是等の神々として顯現し、是等の神の各が其中に天之御中主神を包蔵するのみならず如何なる微妙たる表現神と雖も、亦八百萬神の一切より構成せられつゝある蓋し一己の中に天之御中主神其儘（即ち八百萬神一切により歸一せられ、是等のもの一切として顯現しつゝある唯一神）を包蔵することは、疑ひもなく八百萬神を包容して居ることである、國家の例を採つて見ても其通りて、各人中に國家其儘が含まれて居る、此點より各人を見れば各人は即ち國家其儘であり、其行動は國家自身の行動である、斯く各人が國家の表現人とし

て存する方面よりいへば、君主は有ゆる表現人によりて構成せられ是等を其内に包容するが故に君主であり各下級表現人と雖も、君主の總攬の下に其内に一切の表現人を統括包容するが故に其存在を爲し得るので、少しも之と異つたことはない、天之御中主神と其表現者との間の歸一のみを覺つて、表現者相互間の歸一及び無礙なる圓融、相即即入の關係を悟らぬものは、尙神道及び其哲理に通達せざるものである、基督教とても神人の歸一のみを説き之のみを以て至れりとするは尙最高の悟りてはない、之を人々の歸一に及ぼし、之を一切人に及ぼし、博愛により一切人と歸一するに及んで、誠に神人歸一の要訣を悉くしたるものといひ得るのである。

古神道によれば世界の有ゆる事物は、つまり上は皇産靈神を始め下は不淨不潔極惡に至るまで、天之御中主神の顯現たる根據を失はぬ、歸する所皇産靈神の向上を主義とする造化作用の總攬に服しつゝ皆唯一神の表現者發現者である、尤も注意すべきことは、神神の

を發揚する様に互が日日心掛けねばならのであつて一切を神と爲す力を養成せねばならぬ、此力が創設力の最大のものである、傳道などするにも被傳道者を尊重し其神性を發揚し、其神たる所以を認めつゝ致さねば、誠の心からの傳道とはいへぬ、斯く考へて見れば社會に崇拜せらるる神神の數が多ければ多い程、人心の淺薄を表白するものでなく反つて心の眞面目なる所以を證明するものである、神神の多數なることを以て劣等の教と斷ずるのは速きに失する、

それ古神道に於て神といふことは、其起りに於ては祖先崇拜英雄崇拜天體崇拜自然物崇拜の材料が混じりて居つたものに相違なからうが、古神道として統一せられたる信仰に於ては以上の大精神により統一せられ互に他の權限を尊重し其分擔につき神を見、相待て其神性を保障せしめ發揚して居るのである、されば祖先とても子孫の有する特色を崇拜する、天照大御神は高産靈神と共に天津神籬及び天津若境を起し樹てて天孫代代の爲めに齋さまつらるるも其精神である、子孫

内にも今日我々が特に神社や神籬を起して崇拜すべき神神もあれば、夫程でない神神もあり、其優劣には無類の階段がある、神社に祭られてある神様は至つて僅少のものであるが、其以外の大多數の萬物の根底に存する生命につきても神たるを失はない、吾人が日々接觸する卑近なる事物や平凡なる人間や動物も皆、神性の顯はれてあるから、不純の點を背後に斥けて其神聖の性格のみを見れば即ち神である、何に對しても之を愛し之を粗末にせず之を敬して其所を得せしむる様にせねばならぬ、ゴッドとても敬虔の至情を以て之に對し眞面目の信念を以て之を求めねば無いも同様である敵人じやからとて惡人じやからとて、之を排斥し之を憎むこと計りしてはならぬ、其者の内部に藏して居る神性を尊重し、此點につき彼我の歸一する所以を反省實行せねばならぬ、汚穢じやからとて其神性によりて交はるときは五穀の母ともなる、五穀の母としては汚穢ではなく釋迦牟尼佛よりも聖子キリストよりも優等なる神である、されば何事につけても其神性を見、之

も亦祖先は己の出づる所なれば、此點につき優りたる方であるとして、其本を忘れず崇拜する、本より見れば未は本の儘の結晶にして益々神性の發揚せられたるものであり、未より見れば本は己の存在の根柢淵源である、斯うなつてくれれば單純の祖先崇拜でない加美(神)といふ言葉の意味については種種の設があつて相争ふて居るが、言葉などは第二三段以下のことで神の眞義は上述した所に存するのである、古神道の神は唯一の天之御中主神の表現者として無數に存在する、是等表現者を神といふのは常に皇産靈神の總攬を前提し、向上を實現しつゝある方面よりいふことであるが、此種の神神は有限の分擔を有し又絶對圓滿完全といふものでない、一體天之御中主神としては愛憎善惡の特性に超越して居る宇宙の大生命であるが、其表現者としては始めて有限であつて、同時に種種の性質を具備せられ上下左右の擔當を別にせらるることとなる、絶對に夫自身で愛といふことも善といふこともない、憎とか惡とかいふことがあり、之に對して之を制

御し之を轉ずることを愛とか善とかいふのである、從つて可愛さ餘つて憎さ百倍などといふことにもなる、又憎とか惡とかいふのは、愛や善を爲し遂げ得ざる方についていふので善惡愛憎の双方はつまり相伴ふて居るもので共に心の特定の有限の状態である、特定有限の心理状態の拒否又は轉換が即ち他方になる、されば特定有限でなき不生不滅の絶對の大生命は各自の中に内在し之を發揚することは出来るけれども、有限の心を以て此無限の天之御中主神を眞似するわけには行かぬ、天之御中主神は創設者とも被創設者とも、善とも惡とも、愛の神とも憎の神ともいはれない、眞の唯一神たる天之御中主神に垢淨等のあるべき筈がない、既に不完全もないのに、どうして完全に向つて向上猛進しつゝあるなどといふことがあらうぞ、既に時間と空間を超越して唯一の大生命である、どうして進歩じやの進化じやのといふことがあらうぞ、然し其の表現者發現者について見れば進歩もあり向上もあり創設もあり被創設もあり善惡愛憎以下種々のことがある、是等

動せらるゝに至つて始めて其理想を達し得られたと傳つて居る、大國主神の此和魂を祭つてあるのが大和の大神々社で神社の始まりであり、又天照大御神の和魂をお祭り申してあるのが伊勢内宮で農事につき人民に大恩澤を施しつゝある豊受大神を祭つてあるのが伊勢外宮である

斯様のわけて表現者たる神々には愛憎善惡もあり、憎や惡を支配し之を利用せられ轉じて愛や善美を盛にせらるゝので、何處かに双方の對立があり、結局總攬者の向上により統一せらるゝ、天之御中主神の如き絶對神は我々の如き有限者が惡を轉ずることにつき模範となし得べき神ではない、我々有限者の模範となし得るものは其表現者たる神々である、天之御中主神の大生命は即ち我々の生命として顯はれ其内に含まれて居るけれども、之を發揚するには、表現者たる神々に歸一し、其愛や善に倣ひ又其不完全を轉じ、之によりて始めて統括的の權限を以て天之御中主神に歸一する所以を實現し得るのである、之を基督につき考ふるに、ゴ

の事柄は此絶對唯一の神の表現者について見得るのである、皇産靈神は創設化育生成の神であつて最も愛の力に富める神である、此種の御心の向上理想により萬物が造られ育てられ生成する、此種の心が實に萬法萬物の根本の母である、されど人事に關する善惡などの考は此皇産靈種の程度では生せず、從つて正不正の判斷などは問題とはなつて居らぬ、善惡邪正の考へは遙か降つて伊邪那岐伊邪那美二神を以て始めとして居る

天照大神も亦表現神にをはしませば、和魂や荒魂を有せらるゝのであるが、其荒魂は僅かに三韓征伐の際にお現はしになつた位のこと、常に荒魂を轉じ和魂となし、和魂につき總攬作用を行はるゝのであり、又素盞鳴尊の荒魂と相對し之を統括せられつゝある、是等の神々の下には無数の統括階級をなして存在する神々が在るが、其内に於て著名なる大國主神の如きも和魂と荒魂とを有せられ、荒魂によりては國土平定の功を完成し得られざりしが、御自身の和魂を主として行

ツドはイエス以前から在つたであらうが、イエスによりて始めてゴツドとして活きたので我々各人は直ちにゴツドの眞似は出來ず、反つて「人の子」として長短を併有せしイエスに信賴し彼に模倣し彼に鑒みて神に歸一することを筋道とするのではあるまいか、尤もゴツドは宇宙と對立する其創造者であり、愛を其性質となし、已になぞらへて人間を造られたもので、子たる我々に對しては父である、此點から見ればゴツドは尙皇産靈神と本質を同ふする、而して此ゴツドも此皇産靈神も亦其儘各人に内在して居るのであるから、此點よりいへば各人は即ち現に皇産靈神やゴツドとも歸一して大愛を主として其造化事業を表現しつゝあるものといふことが出来る

之を要するに、古神道は其根底に於て一神に歸しつゝある八百萬の多神を認めつゝある、之は基督教が絶對者たる不生不滅不動の神と愛を主とする人格的の神とを認め、又其表現者たるイエス一人を認め、又其餘の人々の中にも一神が其儘内在しつゝあることを認む

るのと異つては居らぬ、たゞ基督教に於ては萬物中に此神が其儘内在することを正面から認めない、神は常に宇宙と對立する方面につき認められ、宇宙と神との歸一方面は明らかにされて居らぬ、従つて又神全體が各人に内在することを認め乍ら、各人を以て「神の權化、神の表現、即ち神の生命が其儘結晶しつゝあるものにして即ち、神夫自身なり」と認めない、ゴツドの名稱を一ゴツドのみ限つて居るのみである、イエスの本質についてさへも在來相容れざる異説があり、三位一體などを説くことにして居るものもある、つまり基督教も活きたる精神に於ては古神道と背馳して居るものではないが、其立教の形式を異にするまでのことである、神といふ名稱を如何なるものに附して居るかといふことの違ひになる、古神道に於ては、天之御中主神は宇宙と對立もするが、尙根本からいへば宇宙に歸一し、唯一獨在の神ではあるが之に執着せずして一切となつて顯現するので、宇宙の萬物は人と物とを問はず皆其表現者其發現者である、表現者としては各物

來る筈もなからう、又キリストの眞似をのみ致して居つては商賈も政治も學問も出來ぬ、つまり古神道では無理を要求せぬ、皇産世神及び之と同體として總攬者であらせらるゝ神々の總攬の下に於て、各自身の眞面目の現はれてある特色の範圍を通じては、各自こそ反つて萬神に優る神である、天之御中主と最も親密なる者、一步進み天之御中主神自身である、其表現者である。

されば古神道の多神は、一旦一神に歸一し、更に其根據の上に存する多神であるから、凝然不動の一神を認むる教等とは比較出來ぬ程宏大精緻のものである、八百萬の神が在るからとて古神道を捉へて多神教であるといふことは許されぬ、多神教でも一神教でもない又汎理教其他の汎神教でもない、強いていへば以上の各教の長所を悉皆網羅する素質ある表現汎神論を骨子として居るものである、活きたる道である特定の鑄形たる教ではない、始めより勝手に一神教じやの多神教じやの汎神教じやのなどといふ窮窟な實證論又は形式

各人即ち神に外ならず、神人相愛する所てはなく人人唯一つである、發現者としては各皆神の一部分一分子に外ならぬ、各人各物を即ち神といふのは此表現の方面につきていふので、發現の方面につきては神てはなく其統括の下に在る小さき者である、繰返していへば古神道に於ては、宇宙最根底たる大生命は元より、此大生命の被造化的方面と對立し之を造化し生成する活力、並に此力の統括の下に立つ一切の人並に物に、其天之御中主神の表現者たる方面につき「即ち神」として其名稱と實質とを認め、其神々しき本性を尊重せんとするものである、斯くして善惡美醜を其儘公平に認め醜惡を祇ひ清むることによりて其内外の神性を發揚し又此の刺激により益々眞善美を實現せしむることを天之御中主神の大生命に歸一し之を實現する所以とするされば神といふことは如何なる場合、如何なる時、如何なる事項につけても絶對に眞似すべき者、絶對に服従すべき者といふことではない、又其様な事は到底出來るものではない、人間には其儘にゴツドの眞似の出

的鑄形を造つて置いて、之に古神道を當てはめるのは大なる誤解を招く種子である、さればこそ通俗一神教といふて持て漸されて居る基督教とても、其實は眞の一神教でない所に其眞價が存するのである

* * * * *

▲すみがたき心しむるに止まらば

法とくことぞ稀になるべき

▲身にかへて法をさしまん人にこそ

忍び難きを忍びてはみめ

▲みる人を常にかろめぬこそ

終に佛の身にはなりぬれ

海軍の話

海軍大佐 中村 虎之助

五月十八日、統一閣社會部開催の少年會に於て、講話せられたるも、家庭における少年者の爲に掲ぐることをなしぬ (白羽生)

私は海軍の事に就て御話し致さうと思ひますが、海軍の話は澤山ありまして、何から御話したら一番よく御判りになるか知れませんが、一つ二つ申上げて見ましよう、今日はお小さい子供さんが御出ですから、他日御生長になりました時に、御参考になることが宜からうと思ひますから、そう云ふことを御話し致しましよう

扱今日では何れの國でも海軍が盛になつて参りました、日本計りてはありませぬ、何の國でも年々艦が増加して参ります、今の軍艦が一番大きいのは三萬噸で、

射するのである、其から水の中を潜つて進むのが潜航水雷艇と云ふのである、而して潜航艇は水中で潜つて行く故に外の聲からは見えぬ、其れだから人に知られないで、大きな戦闘艦の附近へ行つてから水雷を發射して大損害を與へるのである、魚形水雷と云ふのは皆さんが此頃御覧になる、所澤から飛んで来る飛行船の様である、あの様な形の彈丸を填めて打出すのである、それから潜航艇はドンナ戦をするか、それは日本計でない、何の國でも同じ様に皆持て居て、同じ様な仕方である、だが戦争は何處でするかそれは判らない、海軍は陸軍と異つて少しも障害物がないから困る、だから軍艦には、皆望遠鏡だの双眼鏡だのと大きな素晴らしい眼鏡を置いてある、そうして航海して居る、其内に遠方に恰度徳利の大きな位のものが見える、直に上官に報告する、而すると上官はすぐに梯子を上つて行つて、今話した大きな眼鏡で、其の徳利を鏡の目鷹の目で何時迄も見て居るのである、而して敵の艦も進み、味方の艦も進んで行くから、段々兩方が

尤も之は噸と云つても別に衡にかけて見る譯ではないが、ちやんと判るのである、乗組員は千人位である、今英國で建造中の金剛と云ふ軍艦は、千人も乗れるし、又大砲も十四吋砲と云ふ大きな砲を澤山備付てある、其の砲口は皆さんの頭よりは余程大きい、皆さんも早く大砲の砲口に負けぬ様に大きくならねばならぬ、而して軍艦の長さは六百尺以上で幅は百尺もある、深さは色々になつて居て、恰度卵の様になつて幾重ねにもなつて居る、一番下には魚形水雷と云ふ魚の形の水雷が仕掛てある、軍艦の横つ腹に五六門位宛備付てある、軍艦の一番小さいのは水雷艇驅逐艦で、次に巡洋艦戦闘艦の順序となる、水雷艇は主に魚形水雷を發

ら進むから徳利のやうなものも大きく見えて来る、そうして居る内に段々近寄ると、今度は徳利でなくつて橋が見える様になる、もう油断は出来ない、今話した十四吋と云ふ大きな大砲の丸を填める、其れは器械で填める様になつて居るから造作なく填められる、其の器械は芝居の廻舞臺の様になつて居るから至つて樂である、其から艦と艦の距離も陸上とは異つてよく判らない、大略距離を計ると段々と忙しくなつて来る、其内にズドンと大きな音がする、先達て大きな雷が鳴つた様な大きな音がする、自分の耳は、つんばに成て仕舞ふから、耳の中に綿をつめる、其でも耳ががん／＼してたまらない、其に海の波の烈敷い所だと尙聞けない、其だから従て號令も大きな聲を出さねば、聞けなくなつて来る、而して戦争が烈しくなると、双方から丸が行つたり來たりする、其内に一寸黒い者が見える、尤も打出す時も黒い灰の様に見える、來たなと思ふと、此の統一閣の様な大きな水柱が立つ、其は中々面白いよ、皆さんも早く大きく成つて艦に乗つて御覧なさい、

次は丸が艇に當つた時の話を致しましう、其は當つた時の用意に艇の周圍に厚い鐵板が張つてある、之は廿四時恰度二尺計の厚い鐵板である、其處へ丸が當ると、貫く時もあり、ぶつかつて水に入るものもある、又艇に當つて艇が滅茶／＼に成て仕舞ふ事もある、而するも負傷者が出来る、又音が猛烈であるから乗組の人も耳が聾になつて、何を云つたか判らぬ事が度々ある、其れから次は水雷艇の競争である、其は多くは魚形水雷艇である、此の水雷艇は大きい艇にも小さい艇にもある、水雷艇は小さい艇とも戦ひ大きい艇とも戦ふのである、而して最大距離は一哩半位である、此の丸は水の中を潜つて行くから何時打出されたか判らない、其内に艇の下の方からドンと艇に當る、そうなる大變だ、色々と棚の様に出来て居る艇だから、モ一變、破れた所からは水がドン／＼滲入て来る、そうすると大事な者杯を早く片附て、外の艇に乗移るのである、また夜の時には夕方足元の明るい内に大きい艇は各要所へ隠れるのである、其の時は小さい艇を前の方に置いて置いて置いて置かせるのである、又時に依ては暗い晩にわざと出掛けて色々敵の艇を掃す事もある、而し其時に暗闇で間違つて日本の艇を打つた時は

其者其は腹を切つて仕舞ふのである、其だから余りあわて者でも困る、故に良く捜索するのである、だからウント氣を付けて功を奏する様にするのである、大きい艇になると彈丸が當つても中々早くは沈むて仕舞はない、其れだから彈丸が當つても驚きはしない、だから皆さんも今から度胸を太くしなくてはならない、大は晝間魚形水雷艇を使ふ競争である、晝間は潜航艇は敵味方共に水中を潜て入て敵の艇の附近に行つて水雷を打て損害を與へるのである、而して之は非常に平易いのである、其の替りに敵味方共に此の艇の見えた時は、氣を付けて通れる時には逃げて仕舞う、已上の有様で此の頃の進歩した海軍では、晝も夜も天氣の時も雨天の時も何時も氣を付けなければならぬ、又智恵も勇氣もなくしてはならぬ、イクラ武器がよくても其の使ひ方を良く知て其れ／＼使ふ方法を學ばなくてはならない、皆さんは之からドン／＼勉強して此の立派な武器を巧に使ふ様に成て、而して敵をミナゴロシにする様に心掛けて、而して天子様の爲に忠義を盡す事を望むのであります、であるから皆さんは之からウント立派な人にならるる様に心懸けが大事であります

思想及修養

釋迦の耕作

文學博士 井上哲次郎

古い昔の話ですが、お釋迦様が或時旅行をなさいました、所がその時、婆羅門が耕作の祭をいたしまして盛に人が集まつて居りました、それがお釋迦様はずつと高い所から、祭の模様を見て居られました、所が婆羅門は、お釋迦様を見て、どうも變な氣に喰はぬ奴が來て居ると思つて居りました、もつと氣に喰はぬと思つたのは、大勢釋迦の周圍に寄つて、釋迦を尊敬して居る、一つあれを懲して見やうと思つて、婆羅門が釋迦の處に行つて、「お前は何をして居る、吾々は今日は耕作の祭をして居る、どうもお前は耕作をしないやうだ、吾々が耕作の祭に穀物をどツさり上げて居る、

其の餘りを貰つて喰べやうと思つて來て居るに相違あるまい、さう云ふことをするより、早く自分で耕作をするが宜いではないか、さうすれば穀物がどツさり取れる」と此様に申しました、ところが釋迦が答へまするには、「我も亦大に耕作をやつて居るのである」婆羅門は驚いた、「お前は農具が無いではないか、農具が無くてどうして耕作が出来るか」と斯う言ひましたところが、お釋迦様は「自分は耕作の道具を持つて居る、耕作の道具は佛法の法である、耕して居る所は精神界で、種子は善なる種子である、善根を植付ける、大に耕作をして居るのである」とお答へになりましたさて皆様、お互に善なる種子を蒔き、精神に於て耕作を努むるでなければなりません、殊に男女共に青春の時期に、此善良なる道徳の種子を蒔き、精神界を耕作することがなくてはならぬのであります、どうか此事をお忘れなく修養に努めらるゝを望むのであります

富者の貧相

文學博士 三宅雪嶺

親譲りの財産あるもの、一代で成金となつたもの、福の得やうは區々であるが、何處にか福運があるに相違ない、福運がなくては福が得られやうもない、處が果して福々しいかどうかとなれば、多少の疑問を免れぬ、着物に金がかゝつて居り、時計に金がかゝつて居り、指輪に金がかゝつて居り、或は馬車自動車に金のかゝつて居るのは明白であるが、さて浴衣がけてどうであるか、一緒に温泉に入り一緒に海水浴をし、而して福のあるなしを認め得られるであらうか、金持になれば金持顔になり、貧乏になれば貧相になり、事實の争はれぬものがあるが、金持顔は必ずしも福相ではない、身代は確かに百萬と云ひ千萬といふが、どうも福の神を見るやうな気がせぬ、一億圓の主人と呼ばれる主人を見てもさうである、金はあり餘る程あると見えるが、如何にも福々しいと譽め稱へることは出来ぬ、

にか貧乏性が潜んで居る、餘りに勘定高くしてその結果は吝嗇になり冷酷になる、金を積んで置いて畢竟何をするのか判らぬのである、大いに骨董物を藏に貯へて置いて、其前の部屋に寝泊りして居るのは、福であるか貧乏であるか判らなくなる、其判らぬ所が面相に現はれたりしはせぬか、如何に外貌を飾り富豪らしく見えても、性根が貧乏人と同じくしては何處ぞ貧乏に見えぬであらうか (五月實業の世界)

眞に強き人

文學博士 福來友吉

新門辰五郎と云ふ有名な狹客がある、此の人は人と喧嘩をして、随分人を殺したこともあつて罪の深い人間であるが、負けたことは一度もない、自分より撃劔の強い人と喧嘩をしても勝つた、自分は撃劔は出来なけれど、自分には度胸といふものがある、度胸の無いやうな人間は如何に腕が出来ても、それでは眞劔勝負の時に合はないと言つたそうだ、又近藤勇と

下手な書師が書いた七福神は何とも云ひやうがないけれど、優れた書伯の書いたのは、如何にも福々しい、布袋は裸になつて居ても福々しい、顔は争はれぬもので、金のありなしは自づと外に現はれるのに、富豪の面相が強かち福々しいと限らぬのは何であるか、三日乞食すれば乞食顔となつて仕まうと同様、三日長者となれば長者顔になる筈であるのに、何十年も長者で居ながら、餘り福々しくないので珍らしくない、福の神の面相は書に書いたばかりであつて、之を事實に見るのは寧ろ困難である、といふのは些か不思議なやうであるが、これはもと金持の貧乏性と云ふやうな事から來て居りはせぬか、金持は必ずしも金持相當の事をせぬ、愈々金が殖へて愈々貧乏性となるものがある、金のない者が金を出す場合に、金があり餘りて居つて微しも出さぬと云ふやうな事がある、如何にも吝い、如何にも高臭ひ、其人自ら一見識ある事であつて、くだらぬ慈善事業など一錢も出すべきでない極めて居る處があり、尤もとして聞くべき事があるにしても、何處

云ふ人は一時の幕府の御客であつて、撃劔はどんなに上手でないが、唯だ精神の持方が強かつた、精神に恐れと云ふ心が働くと、もう其人は眞劔勝負になると必ず負ける、強い奴に限つて刀を出して相手の度胸がある奴が無い奴かを試して見る、それはどうしてやるかと云ふと、向ふの出して居る刀の先を此方の刀で押して見るのだ、そうして其時柳が風に吹かれる如く柔かに來るのは必ず恐ろしいさうである、度胸の無い奴は固く電信柱の腕木のやうになつて居る、斯く撃劔の名人になると精神が充分丹田に据つて、自分の手足と云ふものは道具に使つて居る、併し度胸の無い奴になると丹田に精神があるのでなくて、丹田などはもう煎餅のやうに薄くなつて、精神の主人公は腕の所に出張してござる、それだから力を入れ過ぎて固くなつて仕舞ふのである、

要するに人間と云ふものは、實際に力があつても、其力だけを使ふと云ふことは六ヶ敷いものである、即ち吾々の精神中に一種の妨害觀念があるから、そのた

めに精神が充分に働いて精神力を現はすことは出来ぬのである



現在の努力せよ 羽仁もと子

一體自分の境遇や職業の意に充たない場合に、一方ではどうかして自分の満足するやうな境遇が得たいもの、職業が得たいものだ、精々骨を折ることが必要であると共に、假令どんなに不満足な境遇でも仕事でも、それが自分の現在の生命なのであります、真面目に熱心に努力しなければなりません、次の境遇はいつでも現在の生命の充實から芽をふいて来るやうて御座います、若しも現在の境遇が不満足だといふので、唯腰掛けのやうな氣持ちで暮らしてゐるならば、その力のない生命から新たな芽のふきやうはありません、枯れた木の葉でも風の方で彼方此方に運ばれるのであります、新たな芽のふき様のない空つばな暮らしをしてゐる人でも、フトした機會や頼んで置いた人の口入な



最善の信仰

辯護士 吉田 珍 雄

現代の思想界は、複雑混亂の状態に在りて何等の統一なく、人は徒らに好奇に驅られて思想攪亂の賊風を鼓吹するものが多い、中にも淘宮術と稱して、他力の風呂入自力無門關を主張するものさへある、然れども其内容を窺はゞ、敢て尊敬を拂ふべき教とは思はれな、世間多くの人は、神でも佛でも淫祠でも一向に頓着なく、顰の頭も信心がら杯と言ひ、狐狸を難有かつて信ずる人も少なくない、中にも當世の學問を極めし人は、自己の智分を顧みずして宗教を否定し、人生に交渉なしとて嘲笑する輩も多い様であるが、苟くも生あるものは文野の別なく、怖畏と渴仰との心を懷き居るものにして、如何なる英雄豪傑であつても絶體絶命

の場合に臨めば、必ず甯無する心を起すべく、戰慄の時戦地に立ちし戰士が突撃の場合、砲煙彈雨の中に於て齋しく神佛を念じたりと言ふが、宗教上の信仰とは自己以上の働きあるものを渴仰し、之に信頼して自己の活動を堅實にするものである、然らば其信頼すべき對象を撰擇するは太はだ必要な事である、自然物や獸性を頼みたればとて、人格的愛もなく慈もなく智もななく力もないので、何程心を置めて念願したればとて寸分の利益もあるべき筈はない、神道にては八百萬の神を紹介せられ、佛教にては佛名經杯には三千の佛を教へられ、又其佛神の特長も説かれて居るけれども、眞に人生を教ふべきものは幾人もあるべき筈がない、東方の藥師如來は一切衆生の眼疾に治し給ふとか、西方の彌陀佛は謗謗正法五逆の大罪を除き一切の衆生を濟度し給ふとか、大日如來は全宇宙を照し給ふとか説明を與へられて居るが、其特長は皆部分々々であつて、親の子を思ふ愛念の全さに比すれば吾人の身心を托すべき價値はない、全き愛念を缺いては何にもならぬ、

せて、違つた所に運ばれることがありませう、即ち新たに地位を與へられることがありませう、しかもそれは枯れ落ちた葉の風にまじく轉々するやうなものであります、唯だ暫く力なくしてゐた丈けて、枯れきつた葉と同じではないといふかも知れませんが、他動的にても満足する境遇に置かれたならば、あらん限りの力を出して發達すると思ふかも知れませんが、植物の成長にも人間の發達にも時期がある、赤坊時代の生命があり發達があり、子供には子供時代の生命と發達があります、すべてそれ／＼の日に於て精一杯の努力があつて、初めて私共の生涯が本當に榮き上げられるのであります、中に本當の努力のない數年の歲月があつたならば、嘗にその間の生命が空しくなつたばかりでなく、その影響がわれらの生涯の全體を弱めずには置きません、(六月婦人の友)

愛は犧牲の精神を以てするにあらざれば愛の全體でない、予が家には一匹の牝猫を飼つて居るが、この頃三匹の子を産んで育て、居つた、或日隣家に飼はれて居る大犬が玄關先に來て居つたので、予は何気なく一箇の菓子と與へたが、其折彼の牝猫は勝手の方より飛び來りて突然大犬の頸に噛み付きしかば、大犬は喚き叫んで走り去りて了つた、牝猫は常に犬の威に畏れ敵することはせなかつたが、此時猛き勢を以て大に噛み付いたのは、食物を争ふ爲でない、自分の産みたる子に害あらんことを畏れて危険を冒したものであると察せらる、即ち子に對する愛の爲であつたらう、予は曾て法華經に畜種に佛性あることを説き給ひしを讀んで不審に感ぜし事ありしも、此時始めて畜生に佛性を具せしを實驗するを得た、進んで壽量品を拜するに、我亦爲世父救諸苦患者と説き、每自作是念の大愛惑を垂れ給ふを痛切に感孚するものがある、それは文字でない活きた慈悲の精神である、慈悲の大精神と吾人の信仰とが感應し道交し、そこに吾人の佛性は開發するの

である、餘の部分々々の神佛を信賴するの念は漸え、救済の本師は壽量の本佛に在らせらるゝを深く深く渴仰の念を強むるのである、彼の基督教の神は人生に直接の交渉がない、彌陀の慈悲は普遍的でない、況んや陶宮術などに於て他力の風呂入と云ふも、其風呂は如何なる處にあるか、自ら心に觀するなりと言はゞ是れ他力にあらず、自力無門關と教ゆるは出發點を極むることは出來ないではないが、諸法空と云はゞ我自身が生れ來りし所以を知るを得ないではないか

他力風呂入といへるに就て
身の垢は他力の風呂に落ちもせむ
心の垢はいかて洗はん
自分無門關といへるに就て
大空に登る道路は何國ぞと
問ふによしなし關もなければ
關のなき空は人目に見ゆれとも
登る道路は知よしもかな
眞にそうではないか、人は衝動的に生活を遂げたとて

何等の知見なくんば禽獸と探ひ所がない、儒教にて教へざれば禽獸に等しと言ふてあるが、然れども其教には正邪自から岐るゝものがある、能く之を判斷し誦別するのが大業である、假し完全なる教を聞いても、實行せざれば何の役にも立たず、宗教の信仰は思想洗練の力と與ふるもの、人道の根底を明かにし國民道徳の本義を開發するものである、それが眞の宗教である、其健全なる作用ありて始めて信仰に活きた人と謂ふのである、然るに之等の眞義を知らずして、佛敎は死後の得脱を期する教なりと即斷するが如きは、自己の識見の足らざるを證するもので大なる謬見である、日蓮上人は釋迦牟尼の大使命を奉じて、我帝國に出現し、此の國と人とを開導せんが爲に運動せられたので、上人の主張する所、純他力にあらざり純自力にあらず、理想と現實とを適當に調節して満足向上を教ゆるものである、一人を捨てたる教は無益也、是上人が人間を中心としたる立教の要旨である、吾人の生涯僅かに六七十年、須らく我見妄執を去りて正義の信仰に入り永久不滅の實在生活を送るやうにせねばならぬ

▼浪界の奇傑桃中軒雲入道の名正に天下に鳴る、入道が武士道鼓吹のもとに義士の烈傳を語るや、天來美妙の聲、聽者神飛び魂消え感嘆措く所を知らず、入道一たび講壇に立たば、浪界通はやんやと叫んで滿員の盛觀を呈するに至る、雲入道の人氣も亦驚くべきにあらずや、入道數年來、深く日蓮上人の人格に感奮し厚く其教義を仰ぐ、而してこの偉人格を天下に紹介せばやと志し、其講題を訓練するの歲月久しかりしが、造詣愈々深く、洗練愈々積み、之を公にするに當りてまづ識の批正を請はんかと、六月一日午後七時試演會を統一閣に開く、人員を限りて案内しけるも七時二十分二千以上を收容し、餘儀なく入場を謝絶し窓外に在るもの四百、來賓には伊元帥八代黒瀬中將佐藤中山松本石橋岩崎小原各少將筑山田三上の諸博士境野黃洋矢野林檢事等の朝野の名士あり、入道始めに水戸烈士の忠節を語り、最後に日蓮上人伊東御流罪の活歴史、巧妙に藝術化せられて更に一段の感動を與ふ

講すること一時間と五分、終て二階にて來賓の批正を仰ぎ、境野黃洋柴田一能小林一郎佐藤太郎諸氏の注意や希望などありて、入道之を諒とし散會したるは午後十時



活動史

東京

法華經には汝一心精進當能於放逸とある、日蓮上人は如來の使として如來事に精勵せよと誨へられて居る、吾徒力微なりと雖何休安然として日を送るべき奮迅の勢を鼓して天業に履ねばならぬ

▲五月四日午後一時半管川師と野口師との熱烈なる講演があつた
▲十一月一日午後一時三上師の講演の後、本多大僧正の懇切なる教示があつた

▲十七日上野公園精進軒に天晴會例會を開いた、本多師の日本文明と日蓮主義に對する講演ありて益する所多かつた
▲十八日午後一時少年會を開いた、何がして子供の事なれば定期八百餘名を算ふるの盛況を呈し、柳浪小三治の滑稽落語と手品の餘興があつて、坂本萬年小學校長の訓育談、本誌掲載の中村海軍大佐の海軍の話を、子供心に満足と向上を興ふるものがあつた

▲廿五日熊井本光師の勸信談より今成師の佛陀の慈愛に進み、本多大僧正の信仰の要義に就て平易懇切に熟辯するものがあつた
▲六月一日午後一時三上師は現代思潮の二大傾向を論じて日蓮主義の調節を試み、井村師は信仰の對象を明かにし、本多大僧正は立志の要義より説きて開明學談の特長を挙げ、

日蓮主義の發心を講説して卓越せる所以を宜べられ、三百の聽衆何れも感動して湯仰の念を拂ぐるもの多きを加へた
▲四恩教林は五月三日午後七時開いた、三上師の平易なる實行主義の講話により何等かの印象を興へた

▲五月八日小石川原町本念寺にては毎會人出多く三上師の人道と信仰との接觸に關する講説があつた
▲淺草知見會開明會親善會にては、一定の期日に講演を開き、法鼓を鳴らしつゝあるが、赤坂管文寺にては五月廿九日山根日東師の講話あり、品川方面には管川師が熱心能く教田の開拓に努力せられて居る、また大學林有志の青年は、五月十七日道徳布教を試み、小野大森國分氏は江戸川又は勝國寺門前にて盛んに、覺醒の警鐘を應打したりと云ふ

岡山縣下一部の布教日誌

原田日勇記

三上總長長足下毎に健在にして諸種の方面に活動されつゝあるは爲法國實すべき慶事也時恰かも新録垂らんとするの候予の如き應酬性を以て鳴るものと雖も漫りに應接すべきにあらず特會に會せられたる職責を果さざれば佛國の突如の程も如何せんぞと内省の警言が胸を衝き不敏を蒙りて去月五月廿一日單身勇を鼓し吾が岡山縣下寺院遍教の途に就きぬ行程五里田舎のガタ馬車に身を寄せ周匝村久成寺に若此れより先き前住武師師守野師檢校惣代人等幾多の歡迎を受く(同日新任

住職法弟佐々木春赴任入寺を兼ね)夜八時より「本佛の慈愛」なる題下に約一時間の講演を爲しぬ此の地方榮華の最も盛にして頗る多忙を極めたる時機にして聽衆甚だ振はざれども來者何れも熱誠にして等く法雨に浴したるを喜び合へり廿二日は新舊住職の引き續きに立合の爲め禮在廿三日午前九時發足行程僅かに半里有名なる吉井川の渡船場に到れば對岸に吉ヶ原本經寺住職紀野俊耀師惣代人其慈愛らしき子娘の出迎に接し本堂にて法鼓を擡げ八時半より法鼓を開く住職紀野師は予が來山せる所以を告げ人我々無常より説き起し放光の都ならずば何處も皆な吾なるべく空しく明し暮さんは從ら事なれば一心清淨の信念に住すべき事を諭し予は「忘信の信」てふ題下に吾人が信仰は當に有心的ならずして不知不識の閑行住座臥供に信仰生活たるべく且つ當處は昔年當樂院日經上人の化蹟あれば上人の歴史の大略を語り吉ヶ原法華の名を穢さざらん事を切望して止みぬ同じく業重多忙なるも來歴百五十餘にして盛なりし廿四日午前八時半發足土居村本典寺に向ふ行程八里半人車の便に寄る紀野師は所用を兼彼の勇氣リソソ自轉車を走らて同行本典寺に到り午後九時より開演紀野師は「滅る我と滅びざる我」にて本心佛性の題を以て論じ予は「日蓮上人の特長」なる題にて日本建國の理想と聖人の教義勤王愛國人尊主義本尊の各家に超越せるを論じ聽衆の注意を引きたり此の地も新舊と製茶盛んにして來會者多からざりしも村長局長長者等の有力家の來臨ありたり廿五日茲に紀野と扶別

京都

徒らに伽藍佛教を以て誇りとせ生氣ある日蓮主義の大旗を果けて麻痺せる西都の市民に活力を興へつゝあるは大に快事とする所也五月一日妙滿寺に開會を議せし、野老乾爲師は本佛の大慈大悲は妙法五字に具足せるを以て吾人は此五字を孔として母の本佛に接すべしと説き堅實の信仰を喚起するものありたりし「十三日報恩法會及説教を修し野老師の近代信仰の欠點を擧げて信念成佛の意義を明かにせり十五日千本五辻善堂寺に演説會を修す武田顯電師は現代人心の懸候向を指摘して日蓮主義の信仰を叫び用崎英照師は生活問題の歸着は法悦にあり法悦を離れて生活を論ずるの危険なるを説き金光孝碩師明

治天皇の仁慈と日蓮聖人の人格とを懇説し内藤日朗師は朝鮮觀察談を述べて朝鮮布教に對する我徒の方針を説く聽衆何れも求道愛國の風色に顯はる「十八日本山例月講演會を修す武田顯電師は我國民性の特長に六點ありとして日蓮聖人は其権化たり指導者たる事を誦叫す金光孝碩師は發心を詳説し善薩心を起せよと述べ野老師は法師實塔に事起り用出壽量に事顯れ神力喝業に事竟るの文を引ひ用法甚深の教旨を總説して閉會を告げたり

堺

堺市妙壽寺は今回川崎英照師兼務住職として五月廿二日赴任せられ坪永權僧正石井高木川崎本照師等出席し入寺式を行ひ廿四日法鼓式を舉行し法話會を開く石井寛俊師我宗の教義の要點を述べて

廣島

念佛門徒の勢力圏内に在りて日統一の本尊に歸敬すへきを説き川崎英照師は宗教は時の先驅者指導者たるべきものにして能化所化共に其本分を全ふすべきを評説せり今後青年會婦人會を設けて盛んに教義を張るべしと因に當日堀木布教師も大賑より參席せられたりと云ふ

九州布教日誌

中原進應記

春芳既に去り蕪風南より來り樹々の新綠満ちんとする時「道芽を生起せしめ功徳の樹をして善茂扶疏者長せしむ」べく福岡縣下の一帯を遍教せし一端を記さう
「四月廿九日平岡本信師と共に八女郡酒井岡

し津山町本蓮寺に向ふ行程八里午後一時着夜入時より上の町弘通所に於て開演(開會辭)海野師君自調善主義の道徳を論ず(今井善君)日蓮主義と東西の人性觀(徳仁)一十師予は「帝國と日蓮主義」にて建國の精神より神佛佛融合せる所以と神佛基教の欠點は日蓮に因て之を補ひ天下無雙を包容せる日蓮主義であることを論述せり聽衆非常に多く大に盛なりし廿六日岡山本行寺に向ふ行程十六里漸く中國の鐵路に依て岡山縣に於て惣代人諸君の熱誠なる出迎を受け夜七時より能仁僧正と共に鐘淵前紡績會社女工の講演に出席午後一時職工長内理一郎君の迎を受け會社に到るや女工四百餘名は秩序整然入場流石に役員諸君の注意に依り水を打ちたるが如く定として三善伏忍すべきを能仁僧正は「調心の修養」として説き無差別の快辯を振はれ女工一統其他大に感動を興へられたるを喜び合ひたるを見受けたり就中廿七日夜七時より本行寺講堂に於て開演(實は之信仰)須山茂三郎君「三教體現の偉人」能仁一師にして神佛佛の大意融合派を擧げ日蓮聖人は實に體現したる大偉人なりと論議され予「正義觀念と人格」と題し人格の如何は平等を擧げる觀念の正否に因り高下の定るものにして正義觀念に富める人は道に志し難に堪へ死に臨んで恐れざるは志士仁人又は日蓮日經の如く吾人之を學びて師表となすべきなりと論議せり聽衆實に二百餘人にして盛會を極めたり廿八日 數の見送りを受け自房に歸り數日間互る因行を冀前に奉告

に向ひ午後八時光明寺に於て幻燈を應用して日蓮主義の講演を開いた平岡師先づ開會を宣し予は「衛生と社會教育に就て」會衆の感興を惹き更に日蓮聖人の生涯に於ける歴史を示し以て其偉大なる理想圓滿なる信仰を叙述し日蓮主義の現代に必要な所以を説き吾人處世の基準を明確に披瀝し午後十一時閉會を告げた會するもの約二百五十名種に見る盛會であつた「五月一日」三池池銀水村に赴き後波海大郎氏宅を會場とし幻燈應用の講演を開いたこの村は「善法」の郷義是れなり「一師禮共に無間地獄に墮すべし」と日蓮聖人が批判せられし善法然の流に漂へる念佛宗のヨリカタマリばかりである予は此地に生れ幸に出て一乘眞實の御法に値遇するを得た「徒に曠野にすてん身」の「邪師たまねがれ」しことを無上の悦びである此上は法王の宣旨を体し妙教の御を捉げ權教の敵陣を改め日蓮主義の眞歌を奏すべく奮闘活躍するに如くはない午後七時平岡師の念佛を唱へつゝ參集せる老若男女既に滿堂義徒開會を告げ兒童の唱歌（君が代）了りて予は社會教育に就て説き次で出舟後義師の釋尊の一代の事蹟を指し佛敎の要義を教へ人生の歸趣を説き午後十一時半會を閉ぢた聽衆約五十名數日前よりの妖霧散じ降雨霽れ慧日の光進者を顯すの感があつた「五月二日」日蓮志者の懇請を容れ一日の豫定であつたのを再び同所に於て午後七時半より開會することとした予は特に衛生に就て語る所あり次で吾人の來する日蓮主義の立場地を明かにしあゝ誤解されたる日蓮聖人も自辨され

たる法華經蓋し未だ味識せざるの罪なりと唱破し聖道門難行難行の非を説き人師論師の自説に拘泥する勿れ法に依り本佛の金言を信すべしと示し日蓮が開會せる大徳が實に日本人の奉ずべき活ける宗教なりと結び從來の惑を解くものがあつた尙ほ出舟師の釋尊の御一代禮講及び三惡三善二道の説明に次て予は再び聖日蓮生涯の活歴史を指し會衆二百餘名に對し大に啓蒙する所があつた數會十二時「五月六日」平岡師及信徒數名の出迎を受け柳川町妙經寺新告天の高く空際を翔翔して香を噴するを開き尺刺の底く空際を吐くを見て心辨然として無意運落の感があつた、あゝ斯手道風徳香一切に重なるに亦適矣午後七時半平岡師開會の辭を告げ予は社會教育及び釋尊御一代の事蹟を叙べて如何に佛敎が卓越せる宗敎なるかを首肯せしめ尙佛陀の慈悲廣大無量なるを説き善報品に於て開會せられたる本佛と始成正覺の釋尊との關係を論じ事智悲「滿三身即一の所以を幻燈に於て活釋した隨喜參會者本堂に滿ち立衆の餘地なき盛況を呈した「五月七日」午後三時半平岡師の開會の辭出舟師「心てう演題の下に純信徒廿名に對し智度論涅槃經等の經論に據り簡明に心の意義を説き平易なる譬喩を以て而も冗長に流れず極めて巧妙に法華會説して遂に法華經の上より十界互具一念三千の大法に論及し成佛の有無を判じ信仰の要義を格を把握せしめられた法華普く心田に潤ふ感があつた「全午後七時半より平岡師の開會の辭及び所感と述べられ次予は「あなた方の宗旨」と題し先づ

宗教的信仰は其人々の理想目的の表徴なるを以て其信奉する宗教の如何に依りて直に其品性人格を判定するを得べしと道ひ有ゆる迷信を破し成立宗旨を擧げて簡單に批評しあなた方の奉ずべき宗旨は如何なるものかを反省せしめ宗教的信仰の國家社會に及ぼす影響の恐るべきものあるを説き當に自覺せる眞の大日本帝國國民の信奉すべき宗旨は日蓮主義なりと結び約四分にして降壇した一蓮光國圖を照し清風徐に來りて水波にざらざる如き御願が御見へた尙ほ出舟師の日蓮聖人の生涯予の釋尊御一代の事蹟論講共に幻燈を應用して不知不覺の裏に日蓮主義の偉大なる事を感得せしめた數會十一時半兩日共露店までも出て妙經寺に於ける空前の盛會であつたと數名の信徒は語り合つて居た「五月八日」順業會此會は殆んど廿年前佐川師が妙經寺住職の時代に學徒を集めて教養せられし由其教化に與りしもの約五十名毎月二回相集つて温故知新の美風を存して居るとののであるが今回道敎を好徳として親睦會を催された午後八時開會會員石川徹兩君の演説平岡師「因縁に就て」予は「日蓮主義」の一端を披瀝し 演後餘興として福引あり尙種々の響應あり十一時散會「五月三十一日」久留米本寺に於て「舊四月八日」釋尊降誕會を修し午後七時より幻燈講演「開會」は社會教育二は釋尊の御一代を映寫し教育の基礎を教へ佛敎の統一を叫び國民道德の實蹟を説示する所があつた參會の者二百名熱心に傾聴し閉會十一時迄送還するものもなかつた

州其二 五月三日久留米市外二村上橋田議事堂にて青年會主催の下に出舟後義師の教育幻燈講演を開いた聽衆三百餘名頗る盛大であつた「廿一日」岡村徳田演説演青年會聯合にて佛敎上の道德觀を幻燈にて説明し四百五十餘の聽衆一同感動するもの多かつたと云ふ

福井 地明會は五月十六日午後七時相生町妙經寺に開會す増田聖道師は會員と共に實前に修法し宗教の神髓と題して信仰と各林との關係を詳論せられ法雨を心田に灑きたりと云ふ

盛岡 妙道會員は小數の會員なるも異体同心信仰厚く妙道研鑽にかゝり一日金子氏宅八日村田氏宅十三日宮田氏宅に例會を催ふし更に十七日夜法華寺内に演説會を開き二十四日世氏宅に例會を催せりと

東海道 吉美縣正會は四月二十一・二の兩日日本多大僧正並に野口日主師を聘し大講演會を開いた當日一行は午後六時津藤着妙立寺總代青年一同の出迎を受け午後七時白井僧都の開會の辭に次ぎ野口師は本尊と修養との交渉關係を論じ日本多大僧正は宗敎樂樂中に登壇せられ神方品の妙所と題し詳々切々説き去り説き來り約一時間半の轉法輪に流石滿堂七百の聽衆は琴瑟に隨するものあるを見受けた二十二日午前明治天皇御來幸會並に大施設鬼供養あり午後一時白井僧都開會辭に次ぎ野口日主師先帝陛下と日蓮上人と題し陛下の蒼生愛護と上人の衆生憐愍の情とを論明して兩者の契合を明し日本多大僧正は壽量品

千葉 房總に於ける日宗各教團が親手

の妙旨と題し壽量の大意より延て妙法の意義を論じ唱題の際には元氣あれかしと結び五百の聽衆に多大の歡喜と法益とを與へ午後四時開會直ちに見付支妙寺に向はせられた尙二十二日の夜は開會の御正當會を督み終つて講演會を開き朝前師の開會の辭に次ぎ加藤師は上人の人格木下圓通師は統一主義前田圓通師は信仰の妙金光孝碩師は現代の信仰試練等の題に一大法鼓を鳴らし午後十一時無事に閉會を告げた

▲見付第一義會は四月二十二日吉美の講演を終りたる日本多大僧正並に一行の盛臨を仰ひ大講演會を開いた午後七時支妙寺に於て吉田師の開會の辭あり野口僧正は日什上人を懐ふと題し什祖の天下諫言老境彌々鏗鏘たるより延て教の尊重すべき所以を論明し日本多大僧正は佛敎の長所と短所と題し久遠の生命菩薩行等の眞義を混濁して佛敎の長短を論ずること懇々切々滿堂五百の聽衆何れも從來の迷夢一時に晴れて感嘆措く能はざるものゝ如く見受た斯くて日本多大僧正は二十三日午前六時一同の見送を受けて旅順に向はせられた因に山本師は近來彌々教線の擴張を計り中泉町にも月次二回の講演に趣く由

後一時より縣公會堂に大講演會を開き清水山師の歴史の立脚より見たる佛敎各派の主義を論明し小林文學士の國民道德の將來に於て生活と信仰と調和を語り日本多大僧正は日本思想史上の日蓮上人に就て其卓越せる意義を説いて日蓮主義の光彩を發揮し多數の聽衆に日蓮主義の現代に適切な所以を傳へ何れも感動して巴まざるものもあつた

▲萩原夏目師は五月五日千葉郡白井村最福寺に講演を開き人道の本義を明かにして信仰の力を與へ「二六日」中野本城寺七日東源寺東源寺七日「夜及び八日」後より布田樂土寺に講演を爲し日蓮主義の旨を述べて健全なる信仰を鼓吹するものがあつた愈々努めたるまづんば外護の信士を養ふを行らう

北海道 弘前市立正法會は熱誠なる信仰家の團結であるから其運動も突破的で目覚ましきものがあつた五月十四日黒石座に講演會を開きて日蓮主義の超勝せる意義を明かにし次で十八日新寺町本述寺に法華會を催ふし數名の講師其所信を披瀝して信仰を喚起せしむるものあつたと云ふ



統一團翼賛員芳名錄 (第六回)

東京市麻布區霞町 (甲特) 石橋 甫
 同市牛込市辨天町三三 (贊助) 長野 瑛 郎
 同市神田區猿樂町三ノ三 (贊助) 加藤 律 子
 東京府下大森町三八 (甲通) 松尾 くに子
 兵庫縣明石町大藏谷 (甲通) 内藤 日 郎
 東京芝罘平町一 (贊助) 大島 吉 郎

翼賛員寄附金受領報告 (六月一日迄領收分)

金參圓也	大正元九、二—二	小高 日唱殿	金一圓廿五錢	同	大正元十一—二—二	林寅之助殿
金六拾錢	大正二、一—六	秋葉 鉄之助殿	金一圓廿五錢	同	大正二、一—五	諸井 竹治郎殿
金六十錢	同	林仙 太郎殿	金四十錢	同	大正元十一、一—二、二	諸井 みき殿
金六十錢	同	林由 太郎殿	金四十錢	同	大正二、一—三	今成 政之助殿
金六十錢	同	石渡 幸平殿	金壹圓五十錢	同	同	今成 日誓殿
金六十錢	同	林 作 太郎殿	金一圓五十錢	同	同	飯倉 日和殿
金六十錢	同	林 染 藏殿	金一圓五十錢	同	同	伊保内 敦精殿
金六十錢	同	白井 福松殿	金七十五錢	同	同	笹川 よし殿
金六十錢	同	林 清之丞殿	金七十五錢	同	同	今成 とめ殿
金六十錢	同	大谷 伊八殿	金七十五錢	同	同	石渡 英哉殿
金六十錢	同	林 勘太郎殿	金一圓也	同	同	大島 吉郎殿
金六十錢	同	秋葉 重三郎殿	金五十錢	同	同	
金六十錢	同	秋葉 重吉殿		同	同	
金六十錢	同	大谷 徳次郎殿		同	同	
金六十錢	同	伊東 昌章殿		同	同	

大僧正 本多日生師講述

法華經講演集

序說 如來壽量品

洋裝美本 郵稅共 特價金卅五錢

本書は本多大僧正が卓越の識見を以て講妙會員の爲に講說せられたるもの、若し夫れ之を繕かば宗教學上の根本問題は容易に解決するを得べし、今回再刊して道交の士賢に頒たんとす、賣切れざる内に申込みて座右に供ひ之を讀破して思想の向上を圖るべきか、敢て之を薦む

勤行作法

勸請文、助行讀誦(方便品)如是自我偈(正行唱題) 回向文、受持文、○自我偈訓讀……

一部代金五錢●十部以上一割引●郵稅四部毎に金二錢●郵券代用不苦…… 振替口座東京(一二一九)統一團宛

右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられたるものにして、勸請文、回向文の如き最も簡潔にして而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの也、客月來願興の求めに應ずるを得ざりしも、今回さらに印刷に付し製本出來致し一般信徒の爲めに之を頒たんとす、御入用の方は前記代金を添へて御申込あらば發送す

統一團

東北 京市 淺草 區 地

發行所

